平成27年1月実施「ぐんま少人数クラスプロジェクト」に関する調査結果の概要①（調査対象校　小学校320校・中学校166校）

「さくらプラン・わかばプラン」を活用した学力向上対策の推進に向けて

＜アンケートから見えてきた課題＞

○ 少人数指導により、きめ細かな指導ができているが、**教師の指導力の向上や授業改善にはつながっていない。**

○ 学習意欲の向上や学習規律の確保はできているが、**知識・技能を活用し課題解決を図る力の育成には至っていない。**

成果を上げている学校に学ぶ！ ～A小学校～

POINT　一人一人の活動の保障、きめ細かな見取りと支援で学力UP！
CRT学力検査　国語101→106、算数96→108に向上

一斉指導
- ○ 操作的な活動
- ○ 体験的な活動

少人数での
きめ細かな見取り

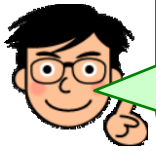
指導に生かす
- 一人一人が自分の考えを説明する活動
- 考えを深める話合い活動
- 教員間で連携を図り、学習状況に応じた指導

ペア学習
グループ学習
習熟度別学習

一人一人の活動の保障
・操作的な活動や体験的な活動を取り入れ、一人一人の考える時間を確保する。集団思考に生かすため、ここで学習状況をしっかりと見取る。

話合い活動の充実
・ペア学習やグループ学習などで自分の考えを説明したり、互いの考えを深めたりする活動を多く取り入れる。

教員間の連携
・算数では「単元の導入で2学級一緒に授業をし、TTで役割分担をしながらきめ細かく見取る」「学級の枠を変更した習熟度別学習を取り入れ、実態に応じた指導をする」など、各学年の教員で協力しながら授業を進める。



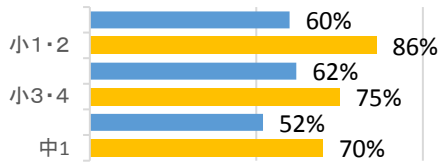
今までは、少人数なので一人一人に時間をかけて指導することを大切にしてきました。校内研修を通して、見取ったことをグループ学習に生かすことで、話合い活動が充実し、子どもたちの理解がより深まることに気付きました。同じ学年の先生と教材研究をし、話合い活動を取り入れた授業を同一歩調で行えるよう研修を進めています。
（A小学校　研修主任）

アンケート結果の比較

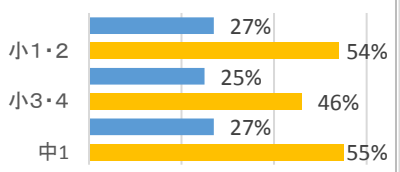
基礎学力「おおむね満足できる状況の学校（■）」と「十分満足できる状況の学校（■）」の回答の割合を比べると以下の項目に大きな差が見られます。

教師の指導面

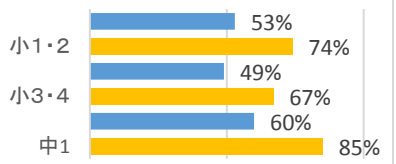
体験的な活動や**話合い活動**を授業に取り入れ、**一人一人の活動**を増やすことができた。



教材研究が充実し、指導力の向上を図ることができた。

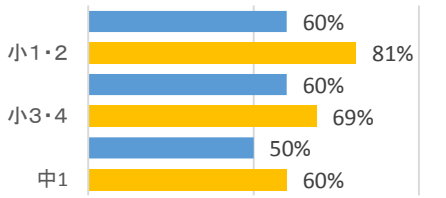


教員間の連携が図られ、組織的な指導体制の充実を図ることができた。

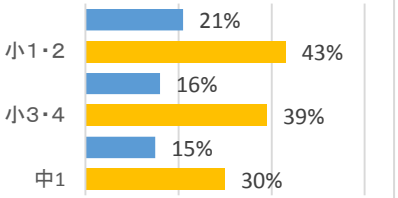


児童生徒の学習・生活面

発言内容やノートの整理が充実してきている。



身に付けた**知識・技能を積極的に活用**している。



＜教師の取組＞
- 体験的な活動や話合い活動を取り入れる。
- 教材研究を充実させる。
- 教員間の連携を図る。

＜児童生徒の変容＞
- 発言内容・ノートの充実
- 知識・技能の活用

さくらプラン・わかばプランで大切にしたいこと

少人数でのきめ細かな見取りを生かし、授業の質的な改善を図る！

平成27年1月実施「ぐんま少人数クラスプロジェクト」に関する調査結果の概要②（調査対象校　小学校320校・中学校166校）

「学力向上特配教員」を活用した学力向上対策の推進に向けて

＜アンケートから見えてきた課題＞

- ほとんどの学校で学力向上特配教員を少人数指導やTTに活用しているが、**学力向上の効果には差がある。**
- 小学校では、理科や音楽では教科担当制が進んでいるが、**ほかの教科はまだ少ない。**

成果を上げている学校に学ぶ！ ～B中学校～

POINT　学力向上委員会の活性化による組織的な取組の推進で、指導力UP！
5教科の実力テストの平均290点→312点に向上

校時表の工夫

- 学力向上委員会や教科部会を校時表に位置付ける。
- 相互授業参観（OJT）を校時表に組み入れる。

授業研究会の工夫

- 参観授業の視点（子ども・教師・教材）を決め、視点ごとに協議し、授業研究を深める。

学力向上委員会や教科部会を校時表に位置付けたため、学力向上コーディネーターとして計画的に対応することができました。学年を超えて教科で共通理解を図りながら授業を進められるよう調整しています。また、参観授業の視点を決めたことで、専門教科でなくても研究会で発言できる人が増え、協議が深まっています。教員の一体感が出て、生徒たちも変わってきています。　（B中学校　学力向上コーディネーター）

成果を上げている学校に学ぶ！ ～C小学校～

POINT　教師の専門性を生かした教科担当制の導入で、学力UP！
CRT学力検査　国語100→108、算数98→105、理科101→112に向上

【第6学年の例】

学級	担任	国	社	算	理	音	図	家	体	…
1組	A教諭	A	B	C・特	理専	音専	A	B	A	
2組	B教諭	A	B	C・特	理専	音専	A	B	B	
3組	C教諭	A	B	C・特	理専	音専	A	B	C	

※特：学力向上特配教員（学力向上コーディネーター）

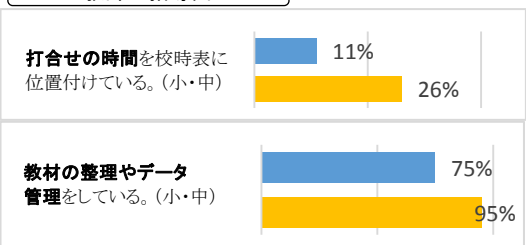
- 国語と社会は該当教科の免許をもつ教員が担当する。
- 算数はC教諭と学力向上特配教員で、1クラスを2つに分けた少人数指導を行う。
- 学力向上特配教員が、担任外で学力向上コーディネーターとなり、全体的な計画の立案や教科担当制の調整をする。
- 理科は、専科教員が「個別の実験」を多く取り入れた指導をする。

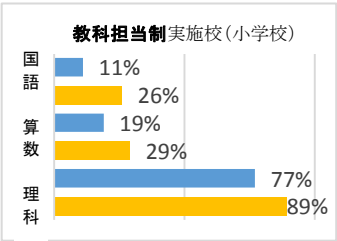
教科担当制をやってみて、はじめは違和感がありましたが、教材研究をする教科が少なく、教材研究の質が高まりました。同じ授業を何回か行うことで自分の授業力を高めることができました。学力向上コーディネーターが毎週の時間割の調整をしてくれ助かっています。　（C小学校　学年主任）

アンケート結果の比較

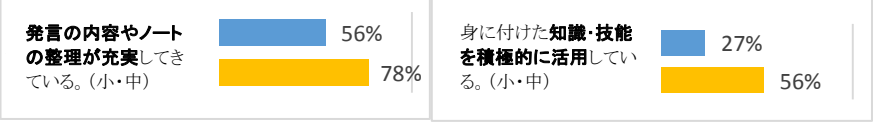
到達目標「おおむね達成した学校（■）」と「十分満足達成した学校（■）」の回答の割合を比べると以下の項目に大きな差が見られます。

教師の指導面





児童生徒の学習面



＜教師の取組＞

- 学力向上計画の実行に向けて、学力向上委員会や教科部会の打合せ時間を確保する等の具体的な調整を行う。
- 授業実践での検証データに基づき、効果的な教材や資料を整理している。
- 小学校では教科担当制を導入する。

＜児童生徒の変容＞

- 発言内容・ノートの充実
- 知識・技能の活用

学力向上特配教員の活用で大切にしたいこと

核となる教員を定めて組織的・機能的な取組を推進する。
小学校では「教科担当制」等による組織的な取組で大きな成果！